

韓愈「孟東野を送る序」について

——「不平」概念の分析を中心として——

伊 崎 孝 幸

はじめに

中唐を代表する文學者の一人である韓愈には「送孟東野序（孟東野を送る序）」（卷一九）という文章がある。^①この序文は『文苑英華』（卷七三〇）、『文章規範』（卷七）といった著名な總集に採録されるほか、韓愈個人の選集にも必ずと言ってよいほど收められ、廣く人口に膾炙している。また、それは單に散文作品の名篇であるだけでなく、韓愈の文學論を考察する上でも重要な觀念が示されているとされ、文學批評史においても不可欠なものとされる。作品の重要性に對する認識は、このように等しく衆目の一致するとこ

ろであるが、それを讀み解く上で最も重要と思われる「不平」の概念については、實はまだ定論とすべきものが提出されていない。「不平」の意味内容については、從來様々な解釋が提出されてきたが、それらの學說の是非について、或いはその學說間の關係等については、現在のところ充分に研究されたとは言い難いのである。そのため、「不平」の語は論者の立場によって種々に解釋され、その意味を正しく把握されないまま、曖昧に、また漠然とテキストから乖離する形で語られてきたのである。

本稿では、できるだけ從來の學說を丁寧に整理、検討しながら、「孟東野を送る序」に見える「不平」の概念をどのように捉えるべきかを考察することにした。これにより、この序文の「不平」の語の意味や機能が明らかになるだけでなく、韓愈の文學論やその文學批評史における位置づけを再考するための重要な示唆を得ることができるのではないかと考える。

一、「孟東野を送る序」について

「孟東野を送る序」の分析に先立ち、まず、この序文が書かれた経緯について簡単にまとめることにしたい。

この序文は、韓愈がその作品を高く評價する詩人の孟東野、すなわち孟郊が、溧陽の縣尉として都を離れて任地へ赴く際に、韓愈が贈った文章である。「序」というのは唐代以降、廣く行われるようになった、いわゆる「送序」

「贈序」であり、送別の際に旅立つ相手に贈られるものである。制作年は、孟郊が溧陽の縣尉に就いた時ということになるが、詳細は明らかではない。孟郊が科擧に登第したのは一般に貞元一二年（七九六）、孟郊四十六才の時とされる。^②韓愈の記した「貞曜先生墓誌銘」（卷二九）に據ると、

孟郊は科擧及第後、「四年を^{へだ}間てて」溧陽の縣尉となったとある。この四年を、四年の間をおいてとするか、或いは四年後とするかで一年のずれが出てくるが、とりあえず貞元一六年、もしくは一七年あたりと推測することができる。下限は、韓愈の「與陳給事書（陳給事に與うる書）」（卷一

韓愈「孟東野を送る序」について（伊崎）

七）に「送孟東野序」を書き寫して與えるという記述があることから、書簡の書かれた貞元一九年ということになる。

ここから貞元一九年説を唱える者もいるが、これは少し遅すぎるだろう。「貞曜先生墓誌銘」の記述を勘案すれば、

貞元一七年前後が妥當なところと思われる。韓愈は、貞元一六年、一七年と吏部の試験に立て續けに落第し、意氣消沈していたが、貞元一八年によりやく試験に通り、四門博士となった。つまり、貞元一八年を境として、その前後では、立場に大きな相違があることになるのだが、必ずしも韓愈が落ち着く貞元一八年より後と斷定することはできないだろう。本稿では、ひとまず貞元一七年頃としておきたい。^③

次に「送孟東野序」の全體を概觀し、その後、從來の説とその問題點について論じることにはしたい。行論の便宜を考慮して、通常よりもやや細かく、五つの段落に分けることにする。^④

〔段落A〕

大凡物不得其平則鳴。草木之無聲、風撓之鳴。水之無聲、風蕩之鳴。其躍也或激之、其趨也或梗之、其沸也或炙之。金石之無聲、或擊之鳴。人之於言也亦然。有不得已者而后言。其詞也有思、其哭也有懷。凡出乎口而爲聲者、其皆有弗平者乎。

（大凡 物は其の平らかなるを得ざれば則ち鳴る。草木の聲無きも、風 之を撓むれば鳴る。水の聲無きも、風 之を蕩かせば鳴る。其の躍るや之を激する或り、其の趨るや之を梗ぐ或り、其の沸くや之を炙る或り。金石の聲無きも、之を撃つこと或れば鳴る。人の言に於けるや亦た然り。已むを得ざる者有りて而る后に言う。其の詞うや思ふこと有り、其の哭するや懷ふこと有り。凡そ口より出でて聲を爲す者、其れ皆な平らかならざる者有るか。）

〔段落B〕

樂也者、鬱於中而泄於外者也。擇其善鳴者而假之鳴。金石絲竹匏土革木八者、物之善鳴者也。維天之於時也

亦然、擇其善鳴者而假之鳴。是故以鳥鳴春、以雷鳴夏、以蟲鳴秋、以風鳴冬、四時之相推敝、其必有不得其平者乎。其於人也亦然。人聲之精者爲言、文辭之於言、又其精也。尤擇其善鳴者而假之鳴。

（樂なる者は、中に鬱がりて外に泄るる者なり。其の善く鳴る者を選びて之を假りて鳴る。金・石・絲・竹・匏・土・革・木の八者は、物の善く鳴る者なり。維れ天の時に於けるや亦た然り、其の善く鳴る者を選びて之を假りて鳴る。是の故に鳥を以て春に鳴り、雷を以て夏に鳴り、蟲を以て秋に鳴り、風を以て冬に鳴り、四時の相い推敝すること、其れ必ず其の平かなるを得ざる者有るか。其の人に於けるや亦た然り。人聲の精なる者を言と爲し、文辭の言に於けるは、又た其の精なり。尤も其の善く鳴る者を選びて之を假りて鳴る。）

段落Aの「物は其の平らかなるを得ざれば則ち鳴る」は本序文の劈頭に位置しながら、以下に展開される議論の主題を既に明示しているという點で、最も重要な部分である。要約すれば、あらゆる事物は、それがもつ平衡状態を失う

と音を發する、ということになる。續いて、草木、水、金石といった自然物、更には人を例に取り、冒頭の一般論がそれらにおいても成り立つことを述べる。

段落Bは、樂器を例に取りながら、「其の善く鳴る者を選ばて之を假りて鳴る」という議論を導く。人が選んで作った樂器、天による四季を象徵する音に續けて、それはまた人においても成り立つとし、よく鳴る者こそが選ばれると説く。ここでは人の「聲」の精粹とでも言うべきものが「言」（通常の話言葉）であり、更にその精粹が「文辭」（書き言葉）であると述べられる。これは當時の士大夫の文辭に對する一般的な考えであつたと思われるが、それを殊更にここで強調する韓愈にとっては、書記言語尊重の意識が一際強かつたことが想像される。以上を要約すると、あらゆるものと同様に、人もまた平衡状態を失うと音を發し、とりわけ人の中から選ばれた者こそが人の聲の精粹である文辭によって鳴り、その優れた文辭こそが後の時代に伝えられるということになるだろう。

〔段落C〕

其在唐虞、咎陶禹其善鳴者也。而假以鳴。夔弗能以文辭鳴。又自假於韶以鳴。夏之時、五子以其歌鳴。伊尹鳴殷、周公鳴周。凡載於詩書六藝、皆鳴之善者也。周之衰、孔子之徒鳴之。其聲大而遠。傳曰、天將以夫子爲木鐸。其弗信矣乎。其末也、莊周以其荒唐之辭鳴。楚大國也。其亡也、以屈原鳴。臧孫辰孟軻荀卿以道鳴者也。楊朱墨翟管夷吾晏嬰老聃申不害韓非慎到田駢鄒衍尸佼孫武張儀蘇秦之屬、皆以其術鳴。秦之興、李斯鳴之。漢之時、司馬遷相如揚雄最其善鳴者也。其下魏晉氏、鳴者不及於古。然亦未嘗絕也。就其善者、其聲清以浮、其節數以急、其辭淫以哀、其志弛以肆、其爲言也亂雜而無章。將天醜其德、莫之顧邪。何爲乎不鳴其善鳴者也。

（其の唐・虞に在りては、咎陶・禹は其の善く鳴る者なり。而して假りて以て鳴る。夔は文辭を以て鳴る能わず。又た自ら韶に假りて以て鳴る。夏の時、五子は其の歌を以て鳴る。伊尹は殷に鳴り、周公は周に鳴る。凡そ詩書六藝に載するは、

皆な鳴ることの善き者なり。周の衰うるや、孔子の徒 之に
鳴る。其の聲 大にして遠し。傳に曰く、天 將に夫子を以
て木鐸と爲さんとす、と。其れ信ならずや。其の末や、莊
周 其の荒唐の辭を以て鳴る。楚は大國なり。其の亡ぶるや、
屈原を以て鳴る。臧孫辰・孟軻・荀卿は道を以て鳴る者なり。
楊朱・墨翟・管夷吾・晏嬰・老聃・申不害・韓非・慎到・田
駢・鄒衍・尸佼・孫武・張儀・蘇秦の屬は、皆な其の術を以
て鳴る。秦の興るや、李斯 之に鳴る。漢の時、司馬遷・相
如・揚雄は最も其の善く鳴る者なり。其の下 魏晉氏、鳴る
者は古に及ばず。然れども亦た未だ嘗て絶えざるなり。就い
其の善き者も、其の聲は清にして以て浮、其の節は數にして
以て急、其の辭は淫にして以て哀、其の志は弛にして以て肆、
其の言爲るや亂雜にして章無し。將た天は其の德を醜みて、
之を顧る莫きか。何爲れぞ其の善く鳴る者を鳴らざるか。

〔段落D〕

唐之有天下、陳子昂蘇源明元結李白杜甫李觀、皆以其
所能鳴。其存而在下者、孟郊東野始以其詩鳴、其高出

魏晉、不懈而及於古。其他浸淫乎漢氏矣。從吾遊者、
李翱張籍其尤也。三子者之鳴、信善矣。抑不知天將和
其聲、而使鳴國家之盛邪。抑將窮餓其身、思愁其心腸、
而使自鳴其不幸邪。三子者之命、則懸乎天矣。其在上
也、奚以喜。其在下也、奚以悲。

（唐の天下を有つや、陳子昂・蘇源明・元結・李白・杜甫・
李觀、皆な其の能くする所を以て鳴る。其の存して下に在る
者、孟郊東野 始めて其の詩を以て鳴り、其の高きこと魏晉
を出で、懈らずして古に及ぶ。其の他は漢氏に浸淫す。吾に
從いて遊ぶ者、李翱・張籍は其の尤なり。三子者の鳴ること、
信に善し。抑そも知らず 天將た其の聲を和らげ、而して
國家の盛を鳴らしめんか。抑そも將た其の身を窮餓し、其の
心腸を思愁せしめ、而して自ら其の不幸を鳴らしめんか。三
子者の命は、則ち天に懸かれり。其の上に在るや、奚ぞ以て
喜ばん。其の下に在るや、奚ぞ以て悲しまん。）

〔段落E〕

東野之役於江南也、有若不釋然者。故吾道其命於天者

以解之。

（東野の江南に役せらるるや、釋然たらざるが若き者有り。

故に吾 其の天に命ある者を道いて以て之を解く。）

段落Cは、人の中でもよく鳴る者、すなわち文辭に優れる者の例を時間軸に沿って具體的に列擧する。堯舜の時代から始めて漢代まで述べたところで一度筆を擱き、魏晉以降もよく鳴る者はいたはずだが、天はその徳を憎んだのか、彼らを鳴らさなかつたと言う。ここで注意すべきは、咎陶、禹、夔、伊尹、周公といった、凡そ「不平」とは關わりのないような人物の名が擧げられている點である。この問題については、また後に詳しく論じることにはしたい。

段落Dでは、更に時代が下り、唐代の優れた文學者を擧げ、その最後に至つてようやく孟郊および李翱、張籍の名が擧げられる。ここでは「國家の盛」を鳴らすことと「自ら其の不幸」を鳴らすことが並列され、孟郊らがそのいずれとなるかはまだ分からないとし、「命」は天に懸かっていると述べる。

韓愈「孟東野を送る序」について（伊崎）

古來の文學者達、ただし夔は音樂であるが、特にその優れた者を次々と取り上げてゆく段落C・Dの擧例部分は、分量において本序文の半ばを占めるだけでなく、韓愈が過去の文學をどのように捉えていたのか、いわばその文學史觀を知る上で、きわめて重要な箇所である。大木康氏は「中國の文學にあつてこの「不平」という問題を意識的に表現し、「不平の文學史」をはじめて描いた」と述べ、韓愈のこの擧例部分を特に重視している。^⑤ここで韓愈は文辭に優れる人物を歴史的に配すること、當の孟郊や李翱、張籍といった周圍の現存詩人達を巨視的に、歴史的な文脈の中で捉え、それによって彼らの詩才を稱贊し、詩人としての自覺を促していると思われる。殊に唐代部分では、漢代あたりまでの文學やその作者達を畏敬し、それを志向する、いわゆる古文家の名が擧げられていることが注目される。李白・杜甫もまた六朝の華美な文風を排した、復古的な詩人として捉えられているのである。

最後の段落Eは、序文執筆の動機を述べた部分である。溧陽の縣尉として任地に赴く孟郊に不満の色が見えたため、

友人としてその煩悶を解きほぐす目的でこの序文を書いたと言う。この段落は、韓愈の「不平」概念を分析する上で必ず参照すべき部分でもあるので、また後述することにした。

二、發憤著書說

本章および次章では、この序文が従來どのように解釋されてきたのか、また、その解釋にはどのような問題點があるのかを仔細に検討することにした。従來の解釋で主要なものは、二つの説に大別される。本章では、その一つである發憤著書說について論じることにした。この説は、本序文に見える「不平」の語を、そのまま不平不満、或いは憤懣の意とするもので、その「不平」概念の淵源を司馬遷のいわゆる「發憤著書」の觀念に求め、後世では歐陽脩「梅聖俞詩集序」の「愈窮則愈工（愈いよ窮まれば則ち愈いよ工なり）」に繋げようとするものである。司馬遷の發憤著書は廣く知られるが、その觀念が提示される文脈もまた本稿の論述と深く關係するので、煩を厭わず『史記』太史公

自序から當該部分を引用する。

太史公遭李陵之禍、幽於縲紲。……昔西伯拘羑里、演周易、孔子厄陳蔡、作春秋、屈原放逐、著離騷、左丘失明、厥有國語、孫子臆脚、而論兵法、不韋遷蜀、世傳呂覽、韓非囚秦、說難孤憤。詩三百篇、大抵賢聖發憤之所爲作也。

（太史公 李陵の禍に遭い、縲紲に幽せらる。……昔西伯は羑里に拘われて、周易を演べ、孔子は陳蔡に厄しめられて、春秋を作り、屈原は放逐せられて、離騷を著し、左丘は明を失いて、厥れ國語有り、孫子は脚を臆られ、而して兵法を論じ、不韋は蜀に遷されて、世に呂覽を傳え、韓非は秦に囚われて、說難・孤憤あり。詩三百篇、大抵賢聖の發憤して爲に作る所なり。）

匈奴に降った李陵を辯護した司馬遷は、武帝の逆鱗に觸れて宮刑に處された。その絶望の内にあつて、なお彼は『史記』の執筆を繼續する。司馬遷は自己を鼓舞するため、

過去の偉大な著作がいずれも作者の不遇を重大な契機としていること、またその不幸から生じる憤懣こそが著述の最も重要な動機となつてゐることを確かめる。作者の身の不幸こそが、その著作を眞に偉大な著作たらしめると考えるのである。「西伯は羨里に拘われて、周易を演べ……」などと具體的に先行する作者とその作品を擧げること、自身もまたその歴史に連なる者であることを強く意識するのである。

従來、韓愈の「孟東野を送る序」に見える「不平」を不平不満の意とし、司馬遷に結び付けてきた者の多くは、韓愈の言う「不平」は、孟郊の抱く「不平」、つまり本序文で言えば、段落Eの「釋然たらざる」ものを指すと考へてきた。たとえば林田愼之助氏は「官位にあきたらぬ孟東野の不平の氣持ちを察した韓愈が不遇不平のなからこそ優れた文學が生まれてくるのだと慰めたのが、この「送孟東野序」である」と述べている。^⑥つまり、現在孟郊は不遇であるが、その不遇こそが彼の文學を高めるのであるから、自身の文學を思い、いたずらに不遇を託つのは止めよ、と

韓愈「孟東野を送る序」について（伊崎）

論していると解釋するのである。そして、段落Cで述べられる過去の偉大な文學者の例は、取りも直さず、司馬遷が自らの不遇を語る際に例とした、不遇な、またそれゆえに一際優れた著作を残した作者達と同一視されてきたのである。

確かに「不平」は、人について言われる場合には、一般に不平不満を意味することが多い。『楚辭』九辯の「坎廋兮貧士失職而志不平（坎廋として貧士は職を失いて志は平らかならず）」などがその典型であり、その後もこの範圍を出ない。しかし、前章で「送孟東野序」の内容を概観した限りでは、韓愈の「不平」は必ずしも不平不満に限定されないように思えた。清・何焯『義門讀書記』（卷三二）はこのことを論じて次のように述べる。

但吾終疑、不得其平四字與聖賢之善鳴及鳴國家之盛處、終不能包含。此韓子之文尙未與經爲一耳。

（但だ吾れ終に疑う、「不得其平」の四字の聖賢の善鳴及び國家の盛を鳴らすに與かる處、終に包含する能わず、と。此

れ韓子の文すら尙お未だ經と一を爲さざるのみ。」

んや

箇中當有不平鳴 箇中 當に有るべし 不平の鳴

(范成大『范石湖集』卷二六「詠河市歌者」)

「不得其平」の四字は通常は不平不満を意味するため、これによって段落Cの舉例部分の聖賢や段落Dの「國家の盛を鳴らす」者を包含することはできない、と言うのである。確かに何焯の言うように「不平」を不平不満として解釋しようとする、この文章には矛盾が生じることになる。不平不満と解釋するには、必ずやこの矛盾を解消しなければならぬのである。

ただ、この序文を發憤著書の方角で解釋することが、比較的古くから行われていることは確認しておいた方がよいだろう。^⑦

韓子未除豪氣在 韓子未だ除せられず 豪氣在り

文章都待不平鳴 文章 都て待つ 不平の鳴

(陸游『劍南詩藁』卷二「野興」)

豈是從容唱渭城 豈に是れ從容として 渭城を唱わ

いずれも「不平の鳴」という獨自の表現からして、韓愈のこの序文を踏まえたものと考えられる。陸游の例は「不平の鳴」を「豪氣」と結び付けていることから、また范成大の例は「渭城」が王維の著名な送別詩「送元二使安西(元二の安西に使いするを送る)」を指し、ゆつたりとそれを歌唱することができないという詩意から、いずれも「不平」は穩やかではない、不平不満の意と解釋できる。ところで、韓愈自身の詩文においてもそうした發憤著書に關わるような言説は見られるだろうか。いくつか例を引いてみたい。

然子厚斥不久、窮不極、雖有出於人、其文學辭章、必不能自力以致必傳於後、如今無疑也。

(然れども子厚斥けらるること久しからず、窮すること極ま

らざれば、人に出づること有りと雖も、其の文學辭章、必ず自ら力めて以て必ず後に傳うるを致さんこと、今の如く疑い無きこと能わざるなり。」

韓愈「柳子厚墓誌銘」(卷三二)

また李白、杜甫の詩の秀でていることを論じて次のように言う。

帝欲長吟哦

故遣起且僵

剪翎送籠中

使看百鳥翔

帝長に吟哦せしめんと欲し

故に起きて且つ僵れしむ

翎を剪りて籠中に送り

百鳥の翔けるを看しむ

韓愈「調張籍」(卷五)

これらが發憤著書の考えと軌を一にすることは、一讀して明らかであろう。いずれも詩人の「不幸」や「不遇」こそが、詩文を書く能力を高めたと捉えているのである。

このように、「不平」を發憤著書によって解釋する歴史

韓愈「孟東野を送る序」について(伊崎)

は古く、また韓愈の詩文にも同様の觀念が見られることからすれば、發憤著書説にもそれなりの理があるように思える。しかし、重要なのは、こうした發憤著書の考えを韓愈が抱いていたということと、この序文の「不平」の解釋とは、自ずから別事だということである。實際、前述した何焯の提起した問題は解かれることなく、そのまま残されているのである。序文を読み解く鍵は、序文の中にこそ求められるべきである。こうした觀點から、近年この文章を別の解釋で讀もうとする動きが見られるようになる。次章ではその新しい解釋について論じることにはしたい。

三、兩義説および一意兩意説

「孟東野を送る序」は、古くから詩話等でしばしば論じられ、近代以降は、いわゆる文學批評史の分野で取り上げられてきた。^⑧ 解釋の歴史という觀點からすれば、近代においては、前章で見た發憤著書説に従うものがほとんどであるが、一九八〇年代半ばから發憤著書説に依據しない説が見られるようになる。この新しい見解に先鞭をつけたのは、

次に擧げる錢鍾書氏の「詩可以怨（詩は以て怨むべし）」である。^⑩

ある。）

一般人認爲「不平則鳴」和「發憤所爲作」涵義相同。事實上、韓愈和司馬遷講的是兩碼事。司馬遷的「憤」就是「坎壈不平」或通常所謂「牢騷」。韓愈的「不平」和「牢騷不平」并不相等、它不但指憤鬱、也包括歡樂在內。……得志而「鳴國家之盛」和失意而「自鳴不幸」、兩者都是「不得其平則鳴」。

（一般の人は「平らかならざれば則ち鳴る」と「發憤して爲に作る所」とは同義であると考えている。實際は韓愈と司馬遷の語っていることは二つの事なのである。司馬遷の「憤」はすなわち「坎壈不平（志を得ず不満である）」、或いは通常の「牢騷（不平不満）」であり、韓愈の「不平」と「牢騷不平」とは同じではなく、それは單に鬱憤を指すだけでなく、歡樂もその内に含んでいるのである。……志を得て「國家の盛を鳴らす」と意を失いて「自ら不幸を鳴らす」とは、兩者いずれも「其の平らかなることを得ずして則ち鳴る」なので

錢氏はここで、韓愈の「不平」と司馬遷の發憤著書との間には明確な差異があると説く。司馬遷の「發憤」が憤りに終始するのに對し、韓愈の「不平」は、自らの不幸を鳴らす不平不満の側面と共に、國家の盛を詠う歡樂をも含んでいるのである。この指摘は、既に見た何焯の説に類似するが、「不平」が鬱憤と歡樂を共に含んでいると明示している點で更に踏み込んだものと言える。本稿ではこの説を「不平」が不幸だけでなく、幸福をも含むという意味で、兩義説と稱することにしたい。錢氏のこの指摘は實に鋭く、それまで發憤著書説一邊倒であつた文學批評史に一石を投ずるものであつた。^⑪しかし、この指摘は必ずしも錢氏の獨創ではないことに注意すべきである。兩義を含むと明言するわけではないが、發想が類似するもの、いわば兩義説の源をなすものとしては以下のような例を擧げることができる。

まずは南宋・沈作喆の『寓簡』である。沈作喆は紹興五

年（一一三五）の進士であり、この書の自序には甲午の年（一一七四）とある。製作年からして、詩話等における最も早い兩義説と言える。しかし、錢氏が前掲論文の注釋で擧げるのを除いては、他書では言及されていない。錢氏も本文を引用していないが、それは次の一節を指すに相違ない。

韓退之言、萬物不得其平則鳴。若蚯蚓者、其材質亦可以自知矣。食后土而飲黃泉、於其分已過。更有何事不平。而如此終夜長鳴、不肯休耶、抑自樂其過分耶。

（韓退之言う、萬物は其の平らかなるを得ざれば則ち鳴る、と。蚯蚓の若き者は、其の材質亦た以て自ら知るべし。后土に食らいて黃泉に飲み、其の分に於いて已に過ぎたり。更に何事の平らかならざるもの有る。而るに此くの如く終夜長鳴するは、休むるを肯んぜざるか、抑そも自ら其の分に過ぎたるを樂しむか。）

（沈作喆『寓簡』卷四）

韓愈「孟東野を送る序」について（伊崎）

韓愈「送孟東野序」の「不平」を踏まえて、その議論を蚯蚓にまで及ぼしている。元來、孟郊の「不平」を慰めるための序文を蚯蚓に轉用するのであるから、そこに自ずから諧謔味が生じることが想像に難くない。しかし、それ以上に注目すべきは、沈作喆がここで展開している議論そのものである。彼は、蚯蚓はその材質からして、不平不満など感じるはずはないが、それにも関わらず、蚯蚓が夜中に鳴き續けるのはなぜか、鳴くのを止めるのが嫌だからか、或いは、その分に過ぎたる状態を樂しんでいるからか、と述べる。「樂其過分」とあるのが重要で、これはすなわち韓愈の「不平」を、幸福をも意味するものとして解釋していることを暗示するものである。諸家が兩義説の例としてこの文章を引かないのは、これが序文に疑義を呈するような記述の仕方、前述した何焯のような書き方ではないからであろう。おそらく、韓愈の文章を踏まえた沈作喆の創作と見なしていると思われる。しかし、「不平」を兩義と讀み解く早い例として、必ず引用すべき文獻である。

韓文公送孟東野序云、物不得其平則鳴。然其文云、在唐虞時、咎陶禹其善鳴者、而假之以鳴。夔假於韶以鳴。伊尹鳴殷、周公鳴周。又云、天將和其聲、而使鳴國家之盛。然則非所謂不得其平也。

（韓文公 孟東野を送る序に云う、物は其の平らかなるを得ざれば則ち鳴る、と。然れども其の文に云う、唐虞に在りし時、咎陶・禹は其の善く鳴る者なり、而して之を假りて以て鳴る。夔は韶に假りて以て鳴る。伊尹は殷に鳴り、周公は周に鳴る。又た云う、天將た其の聲を和らげ、而して國家の盛を鳴らしめんか。然らば則ち所謂其の平らかなるを得ざるに非ざるなり。）

（洪邁「容齋隨筆」卷四）

南宋・洪邁のこの指摘は、これ以降、何度も同様の指摘がなされるという意味で、典型的なものと言える。序文中の「不平」は舉例部分の聖賢に關わり、また「國家の盛」にも關わるので、いわゆる通常の不平不満とは異なるという議論である。何焯は正にこれと同様の指摘を後世におい

てしていたのである。

同じく南宋・祝穆の『古今事文類聚』（別集卷五・瑕疵）にも「公云、物不得其平則鳴。然其云咎陶禹伊周鳴國家之盛、非所謂不得其平者也（公云う、物は其の平らかなるを得ざれば則ち鳴る、と。然れども其の咎陶・禹・伊・周の國家の盛を鳴らすを云うは、所謂其の平らかなるを得ざる者に非ざるなり）」と同様の指摘があるが、單に「不平」は通常の「不平」と異なると言うだけでなく、それを「瑕疵」と捉えている點が注目される。つまり、「不平」が聖賢および「國家の盛」を包括し得ないという矛盾を韓愈の誤謬に歸しているのである。

最後に、詩作品において兩義的理解を示すものを引くことにしたい。それは黃庭堅の「再次韻兼簡履中南玉（再び次韻して兼ねて履中南玉に簡す）三首」其二に見える次の二句である。

與世浮沈唯酒可	世と浮沈して	唯だ酒のみ可なり
隨人憂樂以詩鳴	人に隨いて憂樂は詩を以て鳴る	

これは錢氏前掲論文にも見えるものであるが、「不平」を「憂樂」として兩義的に理解する最も早い例であろう。

ここまで、論者によって多少の相違はあるものの、「不平」は通常の不平不満ではないとする考え方、すなわち、錢氏の兩義説の源とでも言うべきものを見てきた。¹² 詩話等におけるこの序文への言及は、前述の發憤著書説以上に今見たような韓愈独自の「不平」の使用を、時に批難の意を込めつつ、指摘したものが多數を占めてきたということが分かる。こうした指摘が一般的であつたことは、もっと注意されてよいだろう。既に述べたように、近代以降、兩義説が提起されるまで、こうした指摘は全く顧みられることがなかったのである。

つまり、換言すれば、錢氏の指摘を待つまでもなく、本來韓愈の「送孟東野序」は、發憤著書を述べたものではなく、「不平」を通常とは異なる意味合いで用いた特異な文章として認識されていたということであり、これを踏まえて更に言うならば、錢氏の指摘によってはじめて本序文のテキストに即した読みが提示されたと言うよりは、寧ろそ

の指摘によって、ようやく議論が本來あるべきところに戻されたと言えるのである。

錢氏の提示した兩義説は、このように伝統的な問題提起を踏まえたものであり、またテキストそれ自體から析出された嚴密な解釋でもあるという意味で、きわめて優れた説である。この論文が公刊されてからは、兩義説を意識したと思われる解釋が次々と提出されるようになる。

しかし、兩義説が提起された後も、その趣旨は認めつつ、發憤著書説に固執するものが少なからずある。¹³ これは錢氏の説がまだ限定的であることを意味するが、その要因は錢氏の論文それ自體の内にあると筆者は考える。

錢氏の論文のタイトルは「詩可以怨」であつた。『論語』の言葉を踏まえたこの文章の主題は容易に想像されるように、不平不満の文學について論じることにある。その中で敢えて「送孟東野序」に言及し、一般的な解釋であつた發憤著書説を否定しているのである。これは、當時一般に發憤著書説が行われていたということ、また錢氏がそれを批判的に捉えていたことを示している。しかし、この論

文はもとより怨嗟の文學について論じるものであるから、錢氏は「送孟東野序」に觸れた後、すぐに「荊潭唱和詩序」を取り上げ、中國古典文學には不平不満を歌うものが多いと話を戻し、更には歐米の近代文學における不平不満に議論を展開させている。こうしたことからすれば、錢氏の兩義説が議論として必ずしも周到でないことは、自ずから明らかではないだろうか。

たとえば、錢氏は「不平」を兩義的に解釋した際、序文全體をどのように捉えるべきかという重大な問題を明らかにしていない。錢氏の説に従う者も「不平」概念の内容にのみ氣を配り、その言葉の文章全體における機能については全く考察していない。こうしたことが、兩義説が未だ充分ではないとされる所以ではないかと推察する。

ところで、ここにもう一つ、テキストの讀みを改めることで、序文の整合性を圖ろうとする説がある。それは發憤著書説や兩義説ほど知られてはいないが、それらの説の不備を補う重要な指摘を含んでいるように思う。

一篇之中有始竝言兩事、而終只以一事結者。有以一意起、而終以兩意者。如送孟東野序云、大凡物不得其平則鳴、然又云、其在唐虞、咎陶禹其善鳴者。……又曰、天將和其聲、而使鳴國家之盛邪。……豈可謂專不得其平邪。是又以一意起、而兩意終者如此。

（一篇の中、始めに兩事を竝言して、終わるに只だ一事を以て結ぶ者有り。一意を以て起りて、終わるに兩意を以てする者有り。孟東野を送る序に云う如きは、大凡 物は其の平らかなるを得ざれば則ち鳴る、然れども又た云う、其の唐・虞に在りては、咎陶・禹は其の善く鳴る者なり。……又た曰く、天將た其の聲を和らげ、而して國家の盛を鳴らしめんか。……豈に専ら其の平らかなるを得ざるを謂うべけんや。是れ又た一意を以て起りて、兩意もて終わる者 此くの如し。）

（南宋・王楙『野客叢書』卷一九）

一意とは「物不平則鳴」の部分であり、兩意とは過去の文學者の舉例部分および「國家の盛」と「不幸」とを竝列する部分ということになる。一意で始まり兩意で終わると

は、この「不平」概念の内容が文章の途中で變化することを言うのだろう。この説は、錢氏の兩義説が終始「不平」を兩義と捉えることで文章全體の矛盾を解消しようと試みるのに對し、「不平」の一般的な語義である不平不満から始まり、それが文中で兩義、すなわち不平不満と幸福を表すものへと變化すると捉え、その變化に着目して論を立てたものと言える^⑭。

嚴密に考えれば、そのようにテキストの内部で語義の變化が起っていると考える必然性はなく、その表徴も見られないことから、この説をそのまま承認することは難しい。しかし、一意から兩意へというこの考え方は、このテキストを読み解く上で示唆的なものを含んでいるように思われる。次章では、こうした考え方も踏まえて、筆者の考えを述べることにしたい。

四、「不平」概念の再検討

ここまで、「孟東野を送る序」を読む際に必要と思われる主要な説を詳しく見てきた。それは従來の解釋を確認す

韓愈「孟東野を送る序」について（伊崎）

るとというのが主な目的であったが、それだけではなく、これらの學説の一つ一つが當該序文を読むにあたって重要な觀念を提供していると思えたからでもある。

筆者の考えを述べる前に、いくつか確認すべきことがある。一つは韓愈のその他の詩文における「不平」概念についてである。韓愈の發憤著書については既に二章で見たが、「不平」の語そのものについても、やはり見ておくべきだろう。

韓愈「原人」（卷一二）には「天道亂而日月星辰不得其行、地道亂而草木山川不得其平（天道亂れて日月星辰は其の行を得ず、地道亂れて草木山川は其の平らかなるを得ず）」とある。この「不得其平」は「亂」に對應するものであり、また日月星辰の「其の行を得ず」と對になっていることから、悪い意味において平衡を得ないということであり、通常の「不平」と同義と考えられる。また、人について言うものには、以下のようなものがある。

及讀阮籍陶潛詩、乃知彼雖偃蹇不欲與世接、然猶未能

平其心。

（阮籍・陶潛の詩を読むに及び、乃ち知る 彼は偃蹇として世と接せんことを欲せずと雖も、然れども猶お未だ其の心を平らかにする能わざるを。）

韓愈「送王秀才序」（卷二〇）

往事張旭善草書、不治他伎。喜怒窘窮、憂悲愉佚、怨恨思慕、酣醉無聊不平、有動於心、必於草書焉發之。

（往事 張旭は草書を善くし、他伎を治めず。喜怒窘窮、憂悲愉佚、怨恨思慕、酣醉無聊不平、心に動くこと有れば、必ず草書に於いて之を發す。）

韓愈「送高閑上人序」（卷二一）

「王秀才を送る序」は、阮籍や陶淵明は世と交わりを絶とうとしていたが、その詩を読む限りでは、彼らはそれでも心の平靜を保つことができなかったようだと述べる。この「未能平其心」は、落ち着いた穏やかな心情ではない、といった意味であらう。

次の「高閑上人を送る序」は、張旭の書法を論じて、感情の激しさが書をよくするのであって、僧である高閑上人は平淡を旨とするため、その作品は張旭の域にまで達し得ないのではないかと疑問を呈したものである。この「不平」は、一般に不平不満、憤懣と考えられている。ただ、文脈からすれば、もう少し廣く、感情の起伏を言うとするのがよいかもしれない。¹⁵⁾

直接「不平」に言及するものではないが、「荊潭唱和詩序」の「夫和平之音淡薄、而愁思之聲要妙。謹憊之辭難工、而窮苦之言易好也（夫れ和平の音は淡薄にして、愁思の聲は要妙なり。謹憊の辭は工みにし難くして、窮苦の言は好くし易きなり）」という一文も参考になる。文章全體の解釋には諸説あるが、引用部分に關しては、「和平の音」が高位にある者の作品を指し、對して「愁思の音」が不遇な者のそれを指すことは、諸家の一致して認めるところである。それならば、「和平」と「愁思」は對比的に用いられていることになり、「和平」の否定である和平ならざるものは、「愁思」を意味することになる。これは間接的にはあるが、

「不平」（不平）が、不遇なる者、不満を抱く者を表象することになるだろう。

以上の用例を見る限りでは、韓愈は「不平」の語を、基本的には不平不満、穏やかではない、といった一般的な意味合いで用いていることが分かる。つまり「送孟東野序」と同様の用法は他には見られないと言える。そのことからすれば、この「送孟東野序」の「不平」概念については、その一回的、即興的な性質も考慮に入れる必要があるかもしれない。

もう一つ確認しておきたいのは、韓愈がこの序文で立てているような「不平」の語を鍵とした文學史というものが、他に見られるかということである。

「毛詩大序」の「情動於中而形於言（情中に動きて言に形わる）」や『禮記』樂記の「凡音之起、由人心生也。人心之動、物使之然也（凡そ音の起るは、人心に由りて生ずるなり。人心の動くは、物之をして然らしむるなり）」など、人の平靜な状態が外物の刺激によつて動かされ、それが感情となつて表現されると説くのは一般的である。しかし、そ

れを殊更に「不平」という否定的な語によつて説明するのはきわめて稀である。もちろん、例外として卽座に想起されるものに、前述した司馬遷の發憤著書がある。司馬遷はそこで、自身に先行する發憤著書の例をいくつか列挙していた。それは文學史と言えるほど體系的なものではないが、發憤著書の觀念を窺うには十分な内容であつた。既に述べたように、韓愈の「不平」はそのまま不平不満とすることは難しい。そのことからすれば、この兩者の舉例には直接的な關わりがないことになるが、筆者はそうのように斷定することに躊躇を覚える。「不平」の語を鍵とする文學史というあまり類を見ない發想は、發憤著書説の言うように、司馬遷の舉例を意識していたのではないだろうか。

そもそも「不平」といった否定的概念を文學史の基礎とすることへの違和感は、次のような記述からも窺うことができる。

凡物不得其平則鳴。……然謂鳥之鳴春、雷之鳴夏、蟲之鳴秋、風之鳴冬與夫禹咎以文鳴、夔以韶鳴、伊尹鳴

殷、周公鳴周、此乃天機之動、人文之正也。謂之不得其平、則不可。

(凡そ物は其の平らかなるを得ざれば則ち鳴る。……然れども謂えらく鳥の春に鳴る、雷の夏に鳴る、蟲の秋に鳴る、風の冬に鳴ると夫の禹・咎の文を以て鳴り、夔の韶を以て鳴り、伊尹の殷に鳴り、周公の周に鳴るとは、此れ乃ち天機の動にして、人文の正なり。之を其の平らかなるを得ざると謂うは、則ち不可なり。)

(南宋・俞文豹『吹劍錄外集』)

「不平」の語によつて過去の聖賢の文學を説明することへの批難が見て取れるだろう。前に見た何焯などの批判も論理的整合性のみに關するものではなく、こうした聖賢を「不平」とすることへのやや生真面目な批難も含んでいるに違いない。韓愈もおそらくそうした批判を覺悟の上で、儒家の道をも否定しかねない「不平」という語を基礎とする文學史を書いたのではないだろうか。「不平」の語を用いた修辭にはそうした誤解が伴うということ、またそう

した危険を承知の上で、敢えて韓愈が「不平」の語に固執したということは、この文章を讀むに際して念頭に置いておく必要があるだろう。

では、ここまで述べてきたことを踏まえて、この序文における「不平」概念について考えることにしたい。

まず、段落Aの「不平」であるが、發憤著書説はそのまま通常の不平不満の意と解釋した。段落Cの舉例部分や、段落Dの「國家之盛」という言葉とは、嚴密には齟齬するところもあるが、その「不平」は、段落Eの孟郊の状態にも協うものであるから、また發憤著書の考え方それ自體が文章を著す動機の一つとして既に司馬遷によつて提示されているということから、こうした主張がなされ、一般に受け入れられてきた。

これに對し兩義説は、その段落C・Dの部分から、このテキストでは、「不平」は不平不満の意に限定されないということを指摘し、「幸福」も内に含むと主張した。筆者もまたこの「不平」は、そのように兩義的に讀むべきであると考え。語の意味はテキストそれ自體の分析を通して

定められるべきであり、その點、發憤著書説は「不平」という語から想像される發憤著書の觀念から演繹的に案出されているように思われるからである。「不平」を不平不満と短絡する發憤著書説は、兩義説が既に提出された現在においては、けっしてそのままの形で主張し得ないものである。

しかし、その兩義説によってすべての問題が解決するわけではない。そもそも韓愈はこの序文を書くにあたって、それが最も重要な語であるにも関わらず、なぜこのような通常とは異なる「不平」の使い方をしたのであるか。兩義説はこうした問いに對して有効な答を用意できない。なぜなら兩義説は、このテキストの内部のみを分析し、その論理的整合性を期する目的で考え出されたものだからである。つまり、「不平」が孟郊の不遇とどのように關わるのか、「不平」によってこのテキストに何がもたらされているのか、といったテキスト外の状況や他のテキストとの關わりについて、充分に説明できないのである。

ここは、以下のように考えられないだろうか。確かに兩

韓愈「孟東野を送る序」について（伊崎）

義説の言うように「不平」はこのテキストにおいては兩義として使われている。しかし、それは一般的な用例や韓愈の他の用例がそうであるように、本來的には兩義などではなく、否定的な意味として、不平不満の意で使われるものである。韓愈は段落Eで序文の動機を釋然たらざる孟郊の不满を解くためと述べているが、それを象徴するのが、この序文における「不平」の重要性であるはずである。ならば、この「不平」は發憤著書説の言うように、孟郊の不满を受けているとしなければならない。後の「不平」を基礎とする文學史が、我々に司馬遷の發憤著書を想起させるということも韓愈の工夫であろう。つまり韓愈は「不平」を通常通り、不平不満を表す文脈において使い始めるのである。

しかし、注目すべきは、韓愈はどのように孟郊の釋然たらざる状態を下敷として「不平」の語を鍵とする文章を書き始め、読む者にもその流れを意識させながら、實際にはそれを通常とは異なる兩義的なものに轉じさせているということである。不平不満のみを表す語から、平らかではな

い、という本来の語義を軸として、過剰なまでの喜びもまたその内に含むように、意圖的にひねりを加えているのである。前述した一意兩意説は、文中で「不平」の語義の轉換があると述べていた。ここには確かにそのような轉換があることを認めなければならない。しかし、より正確にはそれは文中で行われているのではなく、「不平」の通念とこのテキストとの間で行われていると考えるべきである。

というのも、既に冒頭の句から、「不平」は平衡を缺くという一般的な意味で使われており、それは兩義なのである。「不平」のこうした機知的な語義の轉換、或いは外延の擴張は、その通念と全く異なるという意味で、きわめて逆説的であり、大きな修辭的效果をおさめている。通常の不平不満を踏まえながら、文中では對概念である喜びと結合させるという、この「不平」の獨自な用法にこそ、この序文を読み解く鍵があるのである。

最後に、これをテキストに即して、別の角度から捉え直してみたい。「不平」を兩義的に使うことで、一體何がこのテキストにもたらされているのだろうか。以下、特に重

要なものについていくつか取り上げることにはしたい。

まず指摘すべきは、序文の段落C・Dにおいて、司馬遷の發憤著書を二重寫ししながら、發憤著書に限定されない著作家の例が挙げられていた。ここでは「不平」が兩義的に使われることで、より自由に理想とする文學を示すことが可能となり、自らの文學觀を明瞭に表現することができるとなっている。孟郊をそれらの偉大な文學者に連なる者として捉えることは、おそらく發憤著書を勧める以上に大きな慰めを彼にもたらしたはずである。

また、段落Dに見える「鳴國家之盛」と「自鳴其不幸」という文學の區分は、發憤著書を説く文脈ではまず語り得ないものである。それは言うまでもなく、「不幸」を鳴らすことのみに關わるからである。殊更に「國家之盛」が言われるのには理由がある。前述の「荊潭唱和詩序」にも同様の記述が見えるように、この分類の仕方は韓愈が常に抱懷していたものであり、個人の不幸を詠うことと共に國家の盛を詠うことに、いや寧ろそれを詠うことにこそ、文學の重要な意義があると彼が考えていたからに他ならない。

直前の過去の文學者の舉例部分もそれと同様の考えを示しているだろう。これを慰藉という觀點から見れば、ともすれば自身の「不幸」を詠う傾向のある孟郊を、そうと決まったわけではない、國家の盛を詠うことになるかもしれない、と勵ます意味合いが含まれるはずである。

また、その「命」は天に懸かっていると、位の上下に一喜一憂することを戒めるが、下位にある孟郊に言うのであるから、不遇に悲しむ者への慰めという意味が自ずと含まれるはずである。この箇所で、やや唐突に「天」や「命」という觀念が語られていることにも注意すべきである。これもやはり韓愈の詩文に頻見する觀念であり、韓愈は常にそれを信じることを説いている。ここからは、韓愈の天命觀とでも言うべきものを窺うことができるが、これも單に發憤著書を説く文脈では語られないことに注意すべきである。

今見たような韓愈の思想は、從來、發憤著書説の陰に隠れてしまい、注目されることがなかった。本序文の考えと他の詩文のそれとを今後更に詳しく比較検討する必要がある

韓愈「孟東野を送る序」について（伊崎）

るだろう。このことについては、また稿を改めて論じるところにしたい。

ともあれ、このように韓愈は「不平」の語に元來の不平不滿の響きを残しつつ、それを敢えて兩義的に使うことで、多くの議論や思想をこの序文に導き入れているのである。假に發憤著書を孟郊に説くだけの文章であつたならば、これほどまでに豊かなものにはならなかつたのではないだろうか。おそらく韓愈はこうした議論や思想を盛り込むために、またそれによつて孟郊を慰めるために、「不平」の語を意識的に轉じさせ、序文を構築していつたのであろう。從來の諸説や當の序文を詳しく検討してみると、そうした韓愈の意圖が浮かび上がってくるのである。

貞元二〇年（八〇四）、本序文の甲斐なく、孟郊は溧陽の縣尉を辭任した。孟郊の「不平」は、韓愈の想像を超えるほど大きかつたのであろう。しかし、その「不平」に着想を得たこの序文の眞意を、孟郊は理解していたのではないだろうか。

おわりに

「送孟東野序」について南宋・黃震『黃氏日鈔』（卷五九）に興味深い指摘がある。「歸宿有味、而所以勸止東野之不平者有道矣。師友之義於斯乎在。而世徒以文觀之、豈惟不知公、抑不知文者耳（歸宿味有り、而して東野の平ならざるを勸止する所以の者は道有り。師友の義、斯に於いて在り。而れども世徒、文を以て之を觀る、豈に惟だ公を知らざるのみならんや、抑そも文を知らざる者なり）」。

韓愈の「送孟東野序」が、古くから修辭的な側面に重きを置く形で理解されてきたことを物語る資料である。「文」とは、おそらく序文中の「鳴」字の多用や比喻の大膽さ、また「物不得其平則鳴」という一般的な事象から文學について、また文學史について滔々と述べたてる議論の運び方などを言うのであろう。

現在からすれば、多くの識者によつて指摘され、様々な解釋が生み出されてきた「不平」こそ、この序文の最も修辭的な措辭と考えられる。黃震の鑒みに倣つて言えば、

「不平」が不平不満か兩義かということは、或いは修辭的な「文」の問題でしかないのかもしれない。我々はその底にある種々の問題にこそ思いを致すべきなのであろう。この序文に見られる韓愈の思想など、他の問題については本稿末尾で示唆的に述べたに過ぎないが、今後は序文の内容について、また他の詩文との關わりについて、より一層研究を進めてゆきたいと思う。この序文の内容は、何も孟郊を慰めるといったことに盡きるものではあるまい。

註

- ① 本稿の韓愈の詩文は、通行する東雅堂本を底本とし、屈守元・常思春主編『韓愈全集校注』全五冊（四川大學出版社、一九九六年七月）、『韓愈文集彙校箋注』全七冊（中華書局、中國古典文學基本叢書、二〇一〇年八月）等を參照した。なお、韓愈の詩文の引用に際しては、底本の卷數を記した。
- ② 『唐才子傳校箋』第二冊（中華書局、一九八九年三月）「孟郊」の條、華忱之校訂『孟東野詩集』（人民文學出版社、一九五九年七月）所收「孟郊年譜」など代表的なものは概ね同じ。
- ③ 孟郊が溧陽の縣尉となるのは、「貞曜先生墓誌銘」の記述から、貞元一六年、もしくは一七年とする説が多い。近年の

研究では、齋藤茂『孟郊研究』（汲古書院二〇〇八年一月）付載「孟郊略年譜」も貞元一七年とする。ただ、韓愈が「孟東野を送る序」を書いた時期については、華忱之「孟郊年譜」は、赴任後やや間を置いて貞元一九年とするなど、必ずしも定まっていない。

- ④ 以下の「孟東野を送る序」の訓讀および解釋については、清水茂『韓愈』Ⅰ（筑摩書房、世界古典文學全集、一九八六年六月）、および京都大學中國文學研究室編『唐代の文論』（研文出版、二〇〇八年一〇月）所收の川合康三氏の「孟東野を送る序」の譯注を参照した。

- ⑤ 大木康『不平の中國文學史』（筑摩書房、一九九六年一〇月）一六頁。この著作は韓愈の「不平の文學史」を手掛かりとして、「不平」の精神と文學作品、更には科擧制度との關わりについて考察するなど、「不平」を歴史的に幅廣く論じている。

- ⑥ 林田愼之助「韓愈における發憤著書の說」（中國中世文學評論史、創文社、一九七九年二月。初出は『文學研究』（九大）七〇號、一九七三年三月）四九九頁。

- ⑦ 發憤著書の方向で解釋するものとしては、注釋では南宋・文謙が王子思詩話の「夫聲嗟氣歎、流而至於感傷 其中有不能已已者」を引いて、「不平」を感傷、慨嘆として捉えるのが早い例。

- ⑧ ここで言う近代以降の文學批評史とは、近代的な歴史意識

韓愈「孟東野を送る序」について（伊崎）

に基づき、對象となる作品を客觀的に記述するものであり、主にこうした手法が用いられるようになった二〇世紀以降のものを指す。初期の代表作としては郭紹虞『中國文學批評史』全三冊（商務印書館、一九三四年五月―一九四七年二月）等がある。

- ⑨ 近代の代表的な發憤著書説としては、羅根澤『晚唐五代文學批評史』（商務印書館、一九四七年二月）第七章の「不平則鳴與文窮益工」が早い。

- ⑩ 「詩可以怨」は、もとは一九八〇年一月に早稻田大學で行われた講演。『文學評論』（一九八一年第一期）に掲載され、後に『七綴集』（上海古籍出版社、一九八五年十二月）に収める。ここでは『七綴集（修訂本）』（上海古籍出版社、一九九四年八月）一二五―一二六頁を參照し、適宜符號を改めた。

- ⑪ 王運熙・楊明『隋唐五代文學批評史』（上海古籍出版社、一九九四年一〇月）は錢氏の説を受けて「不平」を廣義に解釋すべきだと述べている。また、敏澤『中國文學理論批評史』上（人民文學出版社、一九八一年五月）の第八章「不平則鳴及其他」でも、「不平」は「鳴國家之盛」と「自鳴其不幸」を共に含むとして、司馬遷の發憤著書と同じではないと言う。

- ⑫ 實際に錢氏が注釋で引用しているのは、沈作喆『寓簡』、洪邁『容齋隨筆』、錢大昕『潛研堂文集』、謝章铤『藤陰客贅』の四例である。嚴密に言えばそれらについて錢氏が兩義

説の源という捉え方をしていないことは、注意しておいた方が良いでしょう。それらの例は「不平」が不平不満の意に限定できないことに疑義を呈し、あわせてそのことを批難したものであると錢氏は捉えているようである。彼はそのことを「狹窄」に過ぎるという言い方で表現している。ただ、沈作喆の『寓簡』がそうであるように、兩義であることを明確に認めているものもあり、また疑義を呈するということはそれ自體、當然その兩義であることを意識した上でのことであるから、それらと錢氏の兩義説との差異を明確にすることはそれほど意味のあることとは思われない。そこで本稿では、そのまま兩義説の源としてこれらの例を取り上げることとした。

⑬ たとえば孫昌武『韓愈詩文選評』（上海古籍出版社、二〇〇二年二月）では韓愈の「不平則鳴」は司馬遷の發憤著書を受けているとする一方で、この序文を仔細に見れば「不平」には兩種の意味があるとする。

⑭ 他の有力な読みとしては、清・馬其昶の説がある。馬其昶は前に引用した『古今事文類聚』を引いて「是知其一説而不知其又有一説、故有此疑」と述べているが、この言い方はここで説明した一意兩義説に類似すると言えるだろう。しかし、詳しく論じる餘裕はないが、實際に馬其昶の意味するところは、おそらく一意兩義説とは異なり、はじめの一説はあらゆる事物は鳴るということ、次の一説は事物の中でも選ばれた

ものこそが鳴るということを指していると考えられる。馬其昶校注『韓昌黎文集校注』（上海古籍出版社、中國古典文學叢書、一九八七年六月）參照。

⑮ 引用文の「不平」を前後どちらに懸けるかで解釋に違いが出る。多くは前の「酣醉無聊」に懸けて不満の意とするが、錢氏前掲論文では、後の「有動於心」に懸けて感情の動きそれ自體を表すとし、これも兩義を意味するとしている。